



本宅墮悪姉妹吸血鬼

紅の闇にちて
墮ちて

— 墮悪研究機構 —

シエラ・ウィター・アイベル

エリシアの姉で実力も実績もある凄腕のヴァンパイアハンター。
スティックに吸血鬼討伐の技術を磨き続けてきた。
ベアトリスは元いた部隊の上官であり友人。



エリシア・アイベル (エリス)

シエラの妹であり吸血鬼討伐を補佐する。
裁縫や回復魔法などが得意。
ミアとは幼馴染みであり友人。



キャラクター紹介



アンテモニオ家に仕える使用人であり
ベアトリスの身の回りの世話をを行う。
エリシアとは幼馴染みであり友人。

ミア・レスト



退魔の名家出身の若手の指揮官。
怪異に立ち向かう部隊を指揮する。
シエラとは旧知の仲であり
その実力にも実績にも感服している。

ベアトリス・コム・アンテモニオ

吸血鬼シエラ



吸血鬼エリス



キャラクター紹介

吸血鬼ベアトリス



吸血鬼ミア



目次

表紙

絵: きりう / 編集: 緋風

キャラクター紹介1

p. 3

キャラクター紹介2

p. 4

目次

p. 5

『紅の闇に堕ちて』

p. 6 - 15

小説: 緋風 / 挿絵: きりう

『魔王討伐任務』

p. 16 - 24

小説: 緋風 / 挿絵: ふっくら

アフターエピソード

p. 25

文: 緋風 / 絵: ふっくら

あとがき・奥付

p. 26

キャラクター紹介3

p. 27

魔王

p. 28

絵: ふっくら

裏表紙

絵: ふっくら / 編集: 緋風

遅かった。

吸血鬼の呪いが進行していると思われていた妹は、
既に彼女自身でその呪いを克服し、
正真正銘の吸血鬼となっていた。

とっさに銀のナイフを握りしめて彼女の心臓目掛けて突き刺そうとするも、
私の手は彼女の左手によって軽くあしらわれてしまった。

「そのナイフは私を殺すためのものじゃないでしょう？」

彼女の細い腕からは想像もできない強い力で私の手が制される。
かつて「私になにかあればそのナイフで刺し殺して」と
懇願していた彼女とは全く逆の、
唾棄すべき高慢な言葉。

驚く私が彼女を視認しようと再び彼女と目のあった私は、
妖しく光る赤い目に取り込まれていく。

「あはっ、いいよそのとろけた顔。いつかお姉ちゃんをこうやって
私のものにしてみたかったんだ」

私の左の首筋に熱い抱擁を感じる。
ああ、私もこうやって堕ちていくのだと悟った。

右手が緩み、カランとナイフが地面へと落ちる音が聞こえる。

ただ……それもいいのかもしれない。
私も妹も苦しんできた日々がこれで終わるのであれば、
私は妹のものになってもよいのだと、そう最後に思った。



「体調、ですか？」

私は御主人様から直接手渡された白い衣装を身に着けながら、御主人様の質問を復唱した。

「そう。お姉ちゃんには吸血鬼になったのだけど、協会から加護を受けていたのだから、なにかしら不都合が出ているかもしれないわ」

私は上着に袖を通し、前のボタンを掛ける。私の体型にぴったりの寸法で動きやすい服装だ。御主人様の裁縫の技術は素晴らしいと感心しながら、御主人様の前で姿勢を正す。

「いえ、特にそのような不調は感じません」

「そう、それは良かった」

「こちらが新しい剣です」

メイド服を着用した女性が私にゆっくりと剣を差し出す。

「ありがとう、ミア」

「……実はエリス様はこの剣を賜わるために街の職人をお願いしてシエラ様にぴったりの品を作らせていたのですよ」

ミアがこっそりと私に耳打ちした。

「それと、こちらの衣装ですが、肩章の紐はこう。それと、ネクタイも少し、直させてください」

ミアに衣装を直してもらうと格段に気が引き締まる。しかし、久しぶりに再会したミアの姿には驚いた。御主人様の幼馴染みで年端もいかないう少女だったはずなのに、今では身長も私に迫ろうかというくらい大人の女性となって、御主人様に仕えている。

「ミアはね、私の最初の眷属になってもらったよ」

御主人様はそう言っていた。

「それと、望むような姿に擬態できる能力も一緒に身につけてね、こんな感じで私の身の回りの世話を行うのに不都合がない姿になってもらってる。それに擬態が便利だから、ミアには斥候みたいな事もやってもらってるの」

御主人様はこの屋敷から基本的に動くことはない。全てのことを従者のミアに行ってもらっているとのことだった。

「それで、ミアに調べてもらって来た、今日の情報。協会本部から吸血鬼事件を解決するために、この地に三名が派遣されて来ているわ。ただ、まだこのことも、私の存在も把握はできていないみたい。まずは吸血鬼をおびき出す餌でも用意するんじゃないかしら」

椅子にゆっくりと座り、肘掛けに肘を突いて気だるような表情をしながら、私に情報を伝える。

「お姉ちゃんは確か、日光に弱いわよね」

「確証はありませんが、おそらく」

「日が落ちてからの行動でいいわ。その三人を仕留めてきて」

「かしこまりました」

「ミア、お姉ちゃんの補佐を。それと、夜になったら例のものを持ってきて。私はここで瞑想して待っているから」

かしこまりました、とミアが深々とお辞儀をする。それを横目に眺めながら、御主人様は眠るようにして目を閉じて瞑想に入ってしまった。

* * *

「ミアは吸血鬼になってから長いのか？」

一緒に廊下を歩きながら、私はミアに問い掛けた。

「そうですね。エリス様が吸血鬼へと覚醒された際に眷属にしていたいたものですか。私の主人はエリス様だけであり、私の身体はエリス様のものです」

「そういえばお前はベアトリスの家の使用人だったのだろ。お前がいなくなってからあそこだいぶ混乱していたぞ。ベアトリスなんか私に何度も相談に来たし」

ベアトリスという言葉聞いたミアがふと足を止め、私の方を振り返る。

「あの女のことは、もうどうでもよいです。しかしシエラ様に私のことをご迷惑をお掛けしたのであれば、ここで謝らせてください」

ミアは腰前に両手を添えて、深々とお辞儀をした。

「いや、そこまでのことではなかったが」

「そうでしたか。では、このことに限らず、なにかあれば私にお申し付けください。エリス様からは、あなたにも誠意を持ってご奉仕するように、厳命されておりますから」

ミアは身体を起こしながらそう言うのと、また私の前を歩き始めた。私の記憶にあるミアは、黒い髪の、少しおどおどしていたが、元気のいい女の子で、とても献身的な子だったのだが、いま、私の目の前を歩いているのは、白くなった髪を結い上げ、瞳も赤く染まり、腰からひよこひよここと小さな翼を生やした、吸血鬼の外見をした女性だった。

「どうぞ、こちらがこの屋敷の中にある、訓練場です。シエラ様は日光に弱く、日中は屋内での活動が基本になるかと思ひ

ますので、こちらを存分にお使いください。もしエリス様から賜われた剣の使い心地が悪いようでしたら、私にその旨をお申し付けください」

* * *

あの夜のことを思い出していた。私が御主人様の眷属となつたあの日のことを。ヴァンパイアハンターであつた私は、愚かにも御主人様の胸に刃を突き立てようとしていた。だが、その行為は御主人様自身によって制され、私は御主人様の吸血を受けて眷属となつた。

が、先程御主人様が仰っていたように、私が吸血鬼となるのはそう簡単なものではなかつた。私の身体に施されていた何重もの加護は、本能的に私の身体を吸血鬼にしようことを拒んでいた。それを御主人様は丁寧に剥がしてくれた。本来ならば吸血鬼はその加護を剥がすことはできず、触れることすら危ういような代物なのだが、元々加護の性質に詳しくかつた御主人様だからこそ実現できる妙技とも言える。他にも銀の剣や銀のナイフを持てなくなったり、協会から支給されている戦闘服を着用できなくなったりしたのだが、それは問題なからう、と私は腰の剣を触って感触を確かめた。

「血の支配」

吸血鬼は自分の血を相手の身体に注ぎ込むことで、どのような状態であろうとも、場合によっては自分より格上の吸血鬼であっても、相手を隷属させることができる。血を操る能力を持っている御主人様は血の支配を他の吸血鬼よりも容易に行うことが可能であり、私の身体にも血を注いでいる。故

に、私は協会に所属していた正規のヴァンパイアハンターという存在でありながら、吸血鬼として目覚めることができた。

吸血鬼になっていく感覚というのは、非常に興味深いものだ。私は両親を吸血鬼に殺されてからというものの、ずっと吸血鬼を恨み続けてきたし、その復讐心を原動力としてヴァンパイアハンターとなり、吸血鬼を狩る技術を磨き続けて今の地位を得た。私の生きる目的が吸血鬼を根絶やしにするというものだったのだろう。が、その人生を全て捨て去って御主人様の眷属になること、吸血鬼になることが、こんなにも心地よいことだったとは思わなかった。吸血鬼になることが気持ち良いことなのか、それとも吸血鬼になる際にそういうふうを意識が変わってしまうのかは分からないが、事実として、今の私はエリス様という素晴らしい主人に仕えることができるといふ多幸感に満たされている。吸血鬼を恨んでいたことが恥ずかしいと思えるほどには、吸血鬼の素晴らしさを、この身を持って体感している。

* * *

その三人の戦士の末路はあっけなかった。前衛二人に後衛一人という標準的な部隊、いや、調査員というような体で調査に派遣されてきた、まだまだ未熟な若い男たちだった。故に私のような高位の吸血鬼がここにいるとは思わず、魅了への対策を怠っていた者が二人。うち一名は後衛だったため、まず彼らを魅了して足止めし、後衛に動きの止まった前衛を後ろから襲わせた上で、彼に喉元を突いて自害させる。いずれも男性だったが故に、女性の私からの魅了の魔眼が面

白いほど決まり、後衛の彼は喜んで私に命を投げ出してくれた。これでいきなり二人を欠いたことになった残りの一人が逃走しようとしたが、この暗闇の中でも視界が冴え、身体能力も向上している吸血鬼の私から逃げられるはずもなく、私の新しい剣で後ろから斬られたその男は地に伏し、そこに私が止めを刺した。怪異を斬るということはよくあったが、人間を斬るという経験には乏しく、斬るというよりは命を奪うという感触を、彼の身体から噴き出して来た返り血に染まりながら感じていた。

「低俗な人間たちが」

私はそう呟きながら、全く生命が感じ取れなくなった三人の死体を尻目に、ゆっくりと闇の中へと歩き出した。

* * *

「おかえり、お姉ちゃん」

二階の手すりに腰掛けた状態の御主人様が、玄関から広間へと入ってきた私に対して話し掛ける。

「起きていらしたのですか」

「そう、今日はお姉ちゃんの初出陣の日だからね、主人として労ってあげるものでしょう？」

「そう、ですね」

「早速私の部屋にいらっしやい」

私は自分の姿を改めて振り返って返答した。

「……私の服はこのように返り血で汚くなっていますので、少々着替えに時間をいただきました」

「その必要はないよ」

ふわり、と御主人様が二階から飛び降りて、私の目の前にスカートの裾を広げながら柔らかく着地する。

「こんな血くらいならすぐに私が吸ってあげる」

御主人様が私へと寄り掛かりながら、私の服の血に染まった部分に手を当てる。すると、もそもそと、私に付いた血が流動性を取り戻したように移動し、御主人様の手の内に収まっていく。

「ふふ、ミアの報告にあつた人たちって、若かったのね。とても瑞々しい血だわ」

その手に移動した血の一部を、人差し指に絡め取ってぺろりと舐めた御主人様が、私に向かって語りかけた。

「ええ、三人とも、未熟で。私の相手としては全く苦戦しない者ばかりでした」

「それはもちろんよ。お姉ちゃんは私の最強の騎士なのだから、そうでないと困るわ」

「騎士、ですか」

御主人様は私の全身の血を全て吸い取ってしまうのか、ゆっくりとその手を滑らしていく。

「御主人様？」

「あらごめんなさい、これで全ての血を取り除くことができたわ」

私の足元まで入念に手を滑らせていった御主人様が、ゆっくりと立ち上がり、今度は私の手を取る。

「さ、いらっしやい」

あどけない笑顔を私に見せて、御主人様は私を部屋へと引

つ張って行った。

* * *

「ワイン、好きだったよね」

「はい、それは。よく飲んでいました」

私の目の前に置かれたグラスに、御主人様が直々に赤ワインを注ぐ。

「それで、どう？」

「どうと言われなくても」

私は御主人様の質問の意図が分からないといった表情をし、ワインの注がれたグラスを手にとって、液面を眺めていた。

「質問が悪かったわね。お姉ちゃんは私たち吸血鬼を狩る側の立場だったでしょ。それに、かつてお姉ちゃんは吸血鬼に対するとてつもない憎悪を持っていた。それがいまはこちら側に来ているの。心の中で矛盾とか、わだかまりはないの？」

「そう、ですね。自分の気持ちをきちんと表現するにはまだ日が浅いのでなんとも言えませんが、今日仕留めて来た三人に対しては、『こいつらはいずれ御主人様に害を及ぼすような人間たちだからここで始末してしまおう』と、それだけ考えて処理を行いました」

「ふーん、それで、お姉ちゃんはその人たちの血を見てどう思ったの？」

私は再び手に持ったグラスの、紅い液面に目をやる。

「とても甘美なものに感じました」

「……吸った？」

「いえ」

私は正直に答えた。あの場所で、私が斬り伏せたのは一人だけ。でもその一人の血にすら手に掛けなかった。そういう、吸血鬼らしからぬ行為を咎められるのだろうか。そう思っただけでいると、御主人様は大きく笑って私に語り掛けた。

「ふっ、ふふふ。そう、そうね。お姉ちゃんが初めて血を吸うのは私が良かったな、なんて思っていたけど、まさか本当に手を出していないとは」

御主人様は身を乗り出し、ワイングラスを持っていた私の手を握ってワイングラスを置くように促した。

「いいよ、今夜は私の血を吸って」

私にワイングラスを置かせ、手を離れた御主人様は、私に顔を近づけながら上着を脱ぎ捨てた。軽装になった御主人様の首元が大きく露出しているのが見える。

「ほら、ここ。どっちでもいいよ。右でも、左でも」

「ですが……」

「ふふっ、じゃあこうしようか」

御主人様の目が妖しく赤く光る。それが御主人様の魅了の魔眼なのであるが、今回もまた私はその光に惑わされて、なにか、心の深いところまで堕ちて、自らの欲望がさらけ出されていくような感覚を得た。

言葉を紡ぐことができなくなった私は無言で御主人様に寄り、両肩を両手で握りしめて引き寄せるようにして右側の首筋に顔を近づけた。

「そう、それでいいの。あなたは私の、私だけの愛しい従者よ。そんな私の眷属が、血を吸ったことがないなんて恥ずか

しいのだから、私が今夜じっくり教えてあげる」

「……いただきます」

思考が麻痺して来ている私は、かろうじてその言葉を口から絞り出すと、本能の赴くままに御主人様に牙を立てた。

「美味しい？ あ、喋らなくていいからそのまま続けて。私は気持ちいいよ。お姉ちゃんに血を吸われるの。このままお姉ちゃんに押し倒されて、無茶苦茶にされたいとも思っちゃうけど、今日はダメ。まずは血を吸うだけ、ね？」

私の身体が満たされていないとは言わないまでも、御主人様の血を欲しがるということは、吸血鬼としてそれなりに乾いてはいたのだろう。はじめは少しだけ吸うつもりが、いつの間にかゴクリ、ゴクリと喉を鳴らす量の血を、御主人様から吸い上げていた。

「ぶはっ」

息が詰まるような感覚を覚え、自然と御主人様から離れてしまった。反動で椅子に倒れた御主人様は首筋から糸のように血を垂らしていて、呆けたような顔をしてこちらを眺めている。私はというと、口元から零れ落ちそうになっている血に気付き、すぐに自分の袖で隠して見られないようにした。

「ありがとう、お姉ちゃん。私に堕ちてきてくれて」

私は口元を拭い去ると、未だ焦点の定まっていない御主人様の前に直立して御主人様の指示を待った。

「行っているわ。お姉ちゃんも今日は疲れたでしょう。ゆっくりおやすみなさい」

私は礼をして、椅子に座ったままの御主人様を横目で確認

しながら、御主人様の部屋から静かに出ていった。

* * *

「次は、ベアトリスが動くかもしれません」

御主人様の部屋から出ると、ミアが静かに佇んでいた。

「ベアトリスが？」

ミアの口からその名前が出てくるのが意外だったが、それ以上にその名前を聞いて嬉しくなった私がいた。

「おや、少し嬉しそうですね」

「ああ、彼女は吸血鬼狩りに対して真摯に取り組んでいる稀な実力者だからな。吸血鬼となった私と本気で剣を交えてくれることが楽しみだ」

「……ベアトリスは相当の実力者です。経験が浅いと言っても彼女の持つ能力自体は吸血鬼が最も警戒すべきものの一つです。私がこう言うのもなんですが、どうかエリス様をお守りください」

「分かった」

私は、御主人様から賜った剣の柄を撫でた。

「ところでお前は休まないのか？」

「はい、私に休息はありませんので」

「といっても一日中ずっと働き続けているのだろう」

たとえ吸血鬼であっても休息が必要な生物などいるものかと思っている私は、ミアにその疑問をぶつけてみた。

「シエラ様、なぜ私がこのような姿でエリス様のお世話をしているのか、その理由が分かりますか？」

「いや、分からない」

突然のミアの問いに意図が掴めずいた私は率直に答えた。

「『私の身体はエリス様のもの』というのは比喻ではなく、その通りの事実なのです」

そう言いながらミアは右手の黒い手袋を外した。驚いた事に、手袋の下から現れたのは白い肌の手ではなく、手の形をした紅い液体だった。

「私はかつて人間だったエリス様と一緒に逃げるときに、命を落とし掛けました。そのとき、エリス様は吸血鬼へと覚醒されることで私を吸血鬼の眷属にして命を救おうとされましたが既に遅く、私の身体の大部分をエリス様の血で構成することでした。延命ができませんでした。だからこのように、エリス様は私の命の恩人であり、そして私そのものであり、不可分な存在なのです」

「擬態ができるのもそのためか」

「そういうことです。エリス様は、このような身体になった私が日の目を見られるように、ある目的に向けて毎日尽力してくださっています。そのようなエリス様に寄り添いたいという想いが、いまの私を形作っています。私に休息はなく、また必要がない身体というわけです」

なるほど、と納得した私は、もう一つ質問をした。

「ミア、一つ聞いていいか？」

「为什么呢？」

「エリス様の目的とは？」

ミアは少し目を開いて私の顔を真剣に見つめた。

「……吸血鬼国家の樹立です」

「御主人様、今晚はいかがなさいますか？」

整った白い礼装に身を包んだ姉が
ブラシで私の髪を丁寧にとかしながら私に話し掛ける。

あの、鬼神のように強く、無愛想で取り付く島もなかった姉が、
私が背中を追うことしかできなかった姉が、
いま、こうやって私に頭を垂れているという状況が、
そしてその彼女自身が、とても愛おしい。

「たまにはお姉ちゃん自由にしていいいよ」

「私の自由に、ですか？」

こういうことを言うと、決まって彼女は困惑する。
いつもは淡々と即決する彼女も、私のことになると少し判断がにぶる。
でも、そうでないといけない。
そうでないと、面白くないのだから。

「欲しければ吸っていいんだから」

「……それでは後ろから失礼します」

私の髪をとかし終えた彼女は手に持っていたブラシをことりと置き
後ろから抱きしめるようにしてゆっくりと私の左の首筋に牙を立てる。

確かに彼女は私の従者になったのだが、
従者だから主人の命令に従うというのでは面白くない。
それに、彼女はまだ潜在的には吸血鬼である自分を受け入れてないようだから、
そういう彼女を私の手で吸血鬼に堕としたい。
だから彼女の意思で血を吸っているように仕向けるのだ。

私の首筋に顔をうずめている彼女の頭を優しく撫でる。
私の血を吸っているときの彼女は、まるで小動物のようにかわいらしい。
そんな彼女が、私は、好きだ。



魔王討伐任務

小説／緋風
挿絵／ふつとら

紅い騎士が廃墟のように静まり返った城へと足を踏み入れる。騎士の名前はベアトリス。全身を血のように紅い色の重厚な鎧で固め、右手には全長が彼女の背丈ほどもある騎士のランスを握りしめ、具足の踵をコツコツと鳴らしながら、ゆつくりと歩を進めていく。彼女が倒すべき敵が、この城の中にいるのである。

「よく来たね、歓迎するよ」

城の正門からまっすぐと伸びる、煉瓦の敷かれた冷たく硬い道。そしてその道を真っ直ぐ進んだ先にある王座に鎮座している、全身を黒の装いで包んだ女性の姿。頭から黒いベールを垂らし、髪に黒い薔薇を差した、葬式に赴く未亡人の如き漆黒の装い。それは喪服のようであり、貴婦人が社交の場へ向かうときに自身を艶やかに見せるために敢えて選ぶような黒いドレスにも見えた。

「魔王、エリス」

女性の目の前で歩みを止めたベアトリスが彼女に向かって確かめるように宣告した。

「へえ、やっぱり私のこと、魔王と呼んでもらえるんだ。嬉しいね」

魔王エリスと呼ばれた女性は、嬉しそうな言葉をベアトリ

スに向かって紡ぐ。しかし、その口調は喜びに満ちた陽気な語気ではなく、あくまで静かに、城内に重く響くような威厳と冷たさを保っていた。

「魔王でなければなんなのですか。あなたがこれまでしてきたこと、そしてこの土地のこと、あなたのその姿」

「吸血鬼じゃないの？ あなたと同じだよ、ベアトリスさん？」

「ふざけないで」

ベアトリスは怒りに任せて右手に持っていたランスを魔王へ向かって突き立てようとする。だが、彼女の突然の攻撃にも驚くことはなく、魔王は腰の右側に添えていたレイピアを少し引き抜き、迫り来るランスの刃に合わせるようにして攻撃の軌道を少し変え、ベアトリスの攻撃を受け流した。

攻撃を凌がれたベアトリスはすぐさま左手でもランスの柄を握り、魔王目掛けて右側へと大きく振るう。が、次にその攻撃が来るであろうことも見越してか、ふわりと座っていた王座から上空へ浮くようにして離れ、ランスによる薙ぎ払いを軽く回避した後に、少し離れた場所へと着地する。

地面へと着地し、その全身を顕わにした魔王。その身長はベアトリスと同じか少し高いように見える。全身を黒衣で覆っていることは着座していたときにも視認できたが、更に付け加えるとすれば、彼女の下半身を覆うスカートの部分にはスリットが入っており、そこから少し彼女の生足が見えていた。

「あのね、私はこういう武器を扱うのは苦手なんだ。お手柔

らかにお願いするよ」

キンツ、と高い金属音を立てて魔王はレイピアを腰にある鞘に収める。武器を収めた魔王に向かって、ベアトリスは再びランスを構え直す。

「戯言は必要ありません。私はあなたを討伐しに来ました。大人しく私に討伐されてしまうか、それとも抵抗するのであれば、私もそれなりの武力を持ってお相手します」

「私を討伐ね。それで、私を討伐できるってことは、吸血鬼になったあなたはどれくらい強いのかな？」

ベアトリスは魔王に返された問いを意に介さず無言でランスを構え続ける。

「ベアトリス・コム・アンテモニオ。お姉ちゃんからよく話は聞いていたよ。退魔の名家アンテモニオ家の長女で、養成所ではお姉ちゃんの後輩。養成所を卒業後はそのままお姉ちゃんのいた部隊の指揮官になって、お姉ちゃんの上官だった期間もあったんだっけ。容姿端麗、才色兼備、退魔師として申し分ない家系に実力。そんな魔を祓う人間の味方が、なんで吸血鬼になったのか、気になるな」

魔王の眼前にいる騎士は、全身を紅い鎧で固めた、気品あふれる紅騎士である。だが、目は赤く、髪は純白に染まっており、開いた口から時折鋭い牙をのぞかせるという、まさに吸血鬼の特徴を備えた姿をしていた。

「それに答えて、なにか状況が変わるのですか」

「変わるかもしれないし、変わらないかもしれないし」

魔王は自らの胸の前で右手を結ぶ。

「それを答える必要もないくらいすぐに終わっちゃうかもしれないし、ね」

魔王は胸元の右手をベアトリスに向かって徐ろに広げる。その手に黒い光が灯ったかと思うと、ゴポリと鈍い音を立てながらベアトリスの足元から黒い液体状のなにかが迫り上がってくる。ベアトリスは足元の状況を見て僅かに動揺したものの、その正体を把握済みと言わんばかりに冷静に言葉を続ける。

「魔界の亡者ですか」

「ふふ、御名答。吸血鬼同士の勝負だと、私の能力は既にあなたたちに把握されているから若干不利。だから私は少しハンデとして魔界の力を使わせてもらうよ」

魔王が会話を進める内にベアトリスの足元の液体は濃度を増してどんどんと黒くなっていき、更に辺り一帯の地面を飲み込んでしまうほどの広さの沼を形成しながら、なおもベアトリスの足元から這い上がってくる。

「甘く見られたものですね。私の実力を観察するつもりだったのでしょうか、あなたも薄々分かっているでしょう。この程度では無駄です」

ベアトリスは右手に持っていたランスをくるりと持ち替え、勢いよく地面へと突き刺す。その瞬間、濃い紅色のランスは表面から白い光に包まれていき、光が地面へ到着するやいなや白い光が爆発的に拡散し、地面に広がる沼を粉々に砕くようにして一切合切を消滅させてしまった。

「うそ、あなた吸血鬼なのにその力を使えるの？」

魔王が驚いたようにその様子を眺めていた。

「あなただって、もはや私たちに常識は通用しないことくらい分かっていてでしょう。私は、吸血鬼という邪な存在でありながら、私の本分である退魔の力を行使できるのです。それに先程のは退魔の術式の中でも基本のもの。元はヴァンパイアハンターとしてシエラに付き従っていたあなたが驚くことはないでしょうに」

ベアトリスが発するシエラという名前を聞いて、少し魔王の口元に力が入るが、すぐに冷静さを取り戻し、魔王もベアトリスに返答するように言葉を続ける。

「あのね、あなたは器用だからできるかもしれないけど、私は吸血鬼になったときにそういうのは使えなくなったの。それに、いまじゃもう私そのものが魔界と同化してしまったから、そういう聖なる力は根本的に使えるはずないわよ」

魔王はベアトリスに向かって構えていた右手で何かを掴むようにして指を動かした。

「でも、少し思い出したわ。あなたにはこの子たちの相手をしてもらうのが良さそうね」

再び魔王の右手に黒い光が灯る。今度は魔王の足元近くの地面に大きな魔法陣が急速に広がって二つ形成されると、そこから黒く艶のある影のような物体が迫り上がってくる。ある程度上昇したそれらをよく見れば両方とも女性の姿をしており、更に固体化が進んでいるのか、彼女たちを覆うようにして脈動する影が、その女性の姿であるなにかの体表から吸収されるように晴れていった。

「シエラ……！」

ベアトリスが驚いた声でその名前を呼ぶ。彼女の眼前に現れた女性のうち片方は、彼女の友人であったシエラだった。

「あ、そっか、あなたはこっちとは面識がなかったのね。紹介するわ、私のミアよ」

「ミア……ですって……？」

ベアトリスは続けてミアと呼ばれた女性を見る。

「お姉ちゃんもミアもね、あなたたち人間の手に掛かって死んでしまったの。私はとても悲しかったわ。でもね、二人共その魂は私がずっとこうやって取り込んでおくことができたの。それで、いま見せているのは、私が取り込んだ魔界の力の応用。魔界から召喚した私の下僕たる竜を物理的な媒介として、二人の魂を融合させて作り出した、この世界専用の、私の人形。もちろん吸血鬼としてこの世界に存在していた二人そのものではないけど、その能力とかは全く同じだし、むしろ魔界の竜の力を得ているから、もっとずっと強いかも、あはっ！」

これまで冷静な声で淡々と喋っていた魔王が、歓喜を示すように声を弾ませた。実際、魔王にとっても嬉しいことだったのだろう。なにせ、死んでしまった大切な二人の人間が、いや、正確にはどちらも吸血鬼だったか、仮初めの姿とはいえ、目の前に物理的に顕現したのだから。

魔王を守るようにして出現したシエラとミアは、両者とも白い髪に赤い目の吸血鬼の姿をしていた。そして無言のままシエラが眼前に右手を突き出すと、そこに黒い霧が集まるようにして彼女の武器である槍を、同じくミアも右手を突き出



すと彼女の武器である大剣を形成し、両者はそれぞれ武器を握りしめてベアトリスに向かって構えた。

「私はここで見ているわ。それじゃあ、お姉ちゃんもミアも頑張ってね」

シエラとミアからは返事はないが、その命令を確かに受け取ったという具合に二人は一斉にベアトリスに襲い掛かる。

まずミアが大剣を振りかぶって勢いよくベアトリス目掛けて振り下ろすも、ベアトリスはそれを一歩後退して避ける。

続けてシエラの槍が勢いよくベアトリス目掛けて飛んできたが、これは右手に持っていたランスの側面を利用して凌ぎ、

ベアトリスはそのままシエラの左側へと飛び退く。

と、それを狙っていたかのようにミアの大剣による第二撃が横薙ぎに飛んできた。

「くっ」

これは避けられないと踏んだベアトリスは、ランスを左手に持ち替えると同時に右手をランスの側面に添えてミアの大剣をランスの柄で受ける。ガキン、と鈍い金属音が響き、ミアの大剣がベアトリスの左側面で止まる。その瞬間、ミアの背後から鋭利な槍がベアトリスの顔面目掛けて飛んでくる。

「シエラっ！」

両手が塞がって防御ができないベアトリスは間一髪で槍を回避する体勢を取りながら、ランスごとミアの大剣を突き放し、同時にミアの右足目掛けて足払いを行った。

大きく体勢を崩すミアと、それに巻き込まれる形でシエラも地面へと転がった。その様子を確認しながらベアトリスは

大きく後ろへ飛び下がり、二人との距離を十分に開けた。

地面へと倒れ込んだシエラとミアだったが、土煙を上げながら即座に立ち上がり、二人同時にベアトリスに向かって自分の武器を構え直す。

「やはり二人相手では手加減をしている余裕はありませんか」
ちらりと魔王の方を見ると、魔王は笑みを浮かべ、彼女たちの戦闘の様子を眺めているようである。魔王はこの戦いに加勢する気はない。そう確信し、ベアトリスはランスを両手で握りしめ、二人に向かって構え直す。

「シエラの武器は槍。ミアの武器は大剣。槍は突きの隙は少ないが、打突の後が大きく無防備になる。一方で大剣は攻撃範囲が広いが、初動が遅い。そして私のランスはどちらの武器よりも刃が長い。ならば」

ベアトリスは自らに確認させるように呟き、ランスの先端をシエラへ切り替えて突進した。

「まずはシエラから！」

高速で接近するベアトリスのランスを武器で受けることなく、ランスの左へと軽く避けたシエラ。その回避に重なるようにして、待っていたとばかりにミアの大剣がベアトリスを強襲する。

が、そこでベアトリスは右足を地面へと突き刺すようにして踏ん張り、身体を左回りへ回転しながらランスを振り回し、ミアの大剣を上空へと弾き返した。突然の、ランス使いから繰り出される攻撃としては想定外のベアトリスの挙動に体勢を崩され固まるミアと、それを冷静に観察しながら次の一手

として手持ちの槍での攻撃を重ねてくるシエラ。

「それと同じですよ！」

今度は勢いよく身体を捻るようにして上空にあったランスを右回りにシエラの槍に向けて叩き降ろした。シエラもミアと同じく体勢を崩してよろめく。その隙にベアトリスは左手を背中に回し、更に身体を切り返して右回りに回転しながら短槍を引き抜き、その勢いのままシエラの胸へと短槍を突き刺そうとした。

しかしその短槍は少し狙いが外れ、シエラの右肩付近を貫通するように突き刺さり、その衝撃でシエラは地面へと崩れ落ちた。

その姿を横目にしつつ、即座にランスを両手で握って構え直し、体勢を崩しているミアに向かって一気に突進した。咄嗟にミアは手に持っていた大剣で防御しようとするが、勢いと硬度で勝るベアトリスのランスを受け止められるはずがなく、大剣の腹を砕かれながら胸部を貫かれたミアは、ベアトリスの目の前で彼女が握りしめるランスに串刺しになって動きを止めた。

「ミア、お前はもう休め。私の従者のときもよく務めてくれたし、その後もだいぶ苦難の道だったのだろう」

大剣から手を離し、ランスにぶら下がるようにして脱力しているミアからの返事はない。そして、ベアトリスのランスからは淡い光が放たれ始めた。その光はミアを包み込み、霧が散るようになってミアの身体は分解されていき、そのままミアの全身は跡形もなく消え去ってしまった。

「私はまた負けたのか」

終始無言で操り人形のように戦っていたシエラが、我に返ったかのように言葉を発した。地面にうずくまりながらベアトリスの方を見上げているシエラの肩には、彼女を縫い留めるようにしてベアトリスの短槍が突き刺さっていた。それ自体はシエラにとっての致命傷ではなかったが、地面に落ちている彼女の武器である槍を拾って再び握りしめることはできなくなっていた。

「ええ、シエラ。あなたの負けよ」

ベアトリスはゆっくりとシエラの方に振り向きながら宣言した。

「私は弱いな」

その言葉を聞いてベアトリスが笑う。

「だって、あなた、吸血鬼になってから全然昔みたいにギラついていなくて、張り合いがなくなっているのですもの」

「そうか」

シエラが目を閉じて息を整える。

「ベアトリス、お前にはいつも迷惑を掛ける」

「いつものことですよ。退魔師なんかやっていると、死んだはずの人間が化けて出てくるなんてよくありますから」

「次は、ないといいな」

「そうですね、次はないことを祈ります」

ベアトリスは右手に持っていたランスの先端をシエラの心臓に向け狙いを定めると、グサリ、とそのまま突き刺さした。先程のミアと同じようにシエラの身体が淡い光に包まれると、

彼女の身体もまた霧のように分解されて消えてしまった。

「あはっ、あははは！ 最高じゃないあなた！ 魔界の力で強化したお姉ちゃんもミアも、二人同時に倒すなんて」

「まがい物の力を手に入れたところで真の強さには至れませんが」

ベアトリスは、大切な二人の人間をこのような傀儡にされて戦わされたことに心底怒りを感じていた。だが、その感情を表に出してしまつては魔王の思う壺であり、魔王を喜ばせることなく、逆に魔王を諫め、また軽蔑するように静かに言葉をつき捨てた。

「ふん、説教はいいわ。だったら今度は私の力を直にあなたに見せつけばいいんだから」

魔王の周囲の空気が震える。まるで周囲の空間が魔王に向かって凝縮していくような錯覚を覚えるほどの引力が発生し、次の瞬間には溜め込まれたそれが一気に決壊するようにして、魔王から彼女の全身を覆い隠して余りある程の莫大な量の闇が放出される。

少しの静寂の後に、魔王を包み隠していた闇が晴れていく。そこには、先程までは未亡人のように全身を黒の装いで固めていたその黒衣の上から、さらに強固な漆黒の鎧を身に着けた、異形の見た目となった魔王が佇んでいた。全身の様々な部位が滑らかで艶のある黒の甲殻で覆われているそれは、魔界生物と一体化していると形容してもいいような、まさに魔界の王たる姿を降臨させていた。

「さあ、第二ラウンドと行こうか」

魔王が左手を眼前に構えると、足元の地面が黒い稲妻を上空へと発しながら、魔王の背丈ほどもある大剣を形成し、空中で彼女の手に収まっていく。魔王がその剣の柄を強く握りしめると、剣の刃が真っ赤に染まり、一層禍々しい邪気を周囲に放っていく。

「『邪竜リゼアルク』っていう名前、聞いたことがあるかしら？」

「知りませんが、既に何匹かの竜を見てきたのですから、今から新しい竜が出てきたって驚きません」

ベアトリスは魔王の突然の問いに、自らが飲み込まれないように素っ気なく答える。

「まあ話は聞いてよ。そいつはね、魔界で最も強力で凶暴で、魔界の王ですら手懐けるのに苦労する、伝説種である竜の中でも最上位に位置する『邪竜』ってわけよ。私も支配するのに苦労したけど、そういうこともあって私が一番気に入っている子なの。その子も私に懐いてくれていて、私との相性は抜群、かな。魔界と同化してしまっている私がこの世界に顕現するためには、さっき見せた暗黒竜のお姉ちゃんや戦闘竜のミアのように、物理的な媒介が必要なの。もちろん、その子を邪竜の姿そのものでこの世界に召喚することはできない。でも、私が顕現する媒介としてなら、呼んでくることができる。そうやってこの世界に生まれたのがこの姿、魔王エリスというわけよ。そして……」

背中からバサリと漆黒の翼が生え、魔王のシルエットを更に巨大に広げる。



「邪竜リゼアルク・エリスということでもある」

それが彼女の本当の姿ということだろうか、パリパリと黒い電流のように魔力の奔流が魔王の身体の隅々にまで走っているのが見え、彼女の全身に魔力が漲っていることが分かる。先程までの淑やかな姿でも胸元にあることを確認することができた吸血鬼を象った紋章も、一際紅い光を放って新しい姿となった魔王の胸元で鈍く輝いていた。

「それで、最後にあなたに聞くわ」

魔王は眼光鋭くベアトリスをにらみつける。

「あなたの主は……あなたを吸血鬼にしたのは、誰？」

「それは、答えられません」

恐ろしいまでの重圧を掛けて言葉を発した魔王と、それを受け止めて毅然とした態度で返答するベアトリス。

「あなたは元々、神聖な力で守られている存在。たとえ吸血鬼に血を吸われようと、あなたを吸血鬼にできる吸血鬼は限られるの。でも、私が知っている吸血鬼にそんな奴は思い当たらないわ。となると可能性としては二つ。私の知っている吸血鬼の中にそんなことが出来る奴がいて私にその力を隠していたか、それとも私の知らない最高位の吸血鬼が人間に匿われているか。いずれにしても、そういう世界の理を書き換えてしまえるような吸血鬼がいるとすれば、魔界と融合し魔王となった私ですらこの世界では消滅させられてしまうかもしれない。そんな危険な存在を野放しにしておけないわ」

淡々と説明する魔王に対し、ベアトリスは歯を食いしばってその発言を耐えるように話を聞いていた。その表情からも、

魔王の意見は妥当なものであったことが伺える。ただ、ベアトリスは依然として何も答えることなく、静かに魔王の outf 方を伺っていた。

「ふん、まあいいわ。前者であれば、これからあなたみたいな不埒な吸血鬼が生まれないように、あなたを叩き潰した後でゆっくりとそいつを殺しに行くだけだし、後者であればあなたを倒して取り込んでしまえばいずれ正解にたどり着くわ。あなたと押し問答しても、私じゃ、あなたから有用な情報を引き出すことができないもの。だからさっき最後の質問にするって言ったの」

魔王は左手に握り締めた魔剣を、彼女の背丈ほどもある重厚な大剣を、その華奢に見える腕で軽々と上空へと振り上げた。

「私は、私たちを見捨てたこの世界を壊す。その過程で邪魔になるあなたをここで叩き潰す。潰して、世界を壊して、人間も吸血鬼も全て私が滅ぼして、全てを取り込んであげる。それが嫌なら私を止めてみなさいよ」

魔王エリスは魔剣をベアトリスに向かって振り下ろした。

そして 未来へ続く世界のために。

「ほら、あなたが人類最後の砦なんでしょう？
もっと足掻いてみせなさいよ」

ベアトリスの眼前の景色が変わった。
人型だったはずの魔王はその姿を捨て
巨大なドラゴン……いや、悪魔としか形容のしようがない
異形の怪物となって目の前に佇んでいた。

「お姉ちゃんもミアもあなたと戦いたいってウズウズしてる」
魔王の身体から伸びる双頭の竜が
魔王の呼び掛けに応じて甲高い鳴き声を上げる。
ベアトリスは引き続き魔王に立ち向かい応戦するも
その攻撃は魔王に届かず、
軽くそれぞれの竜にいなされてしまう。

そもそもベアトリスの武器でその硬い鱗を貫けるか怪しい。
幸い、魔王の動きは彼女よりも緩慢だ。
勝機がないわけではない。だが……

「吸血鬼のくせに、血を供給してもらおう伴侶を
連れてこなかったのが敗因ね」

双頭の竜が急速にベアトリスから離れたと思った瞬間
魔王の左手に構えられた巨大な斧が振り下ろされ
眼下の地面を粉々に割る。
彼女はすんでのところでその攻撃をかわし、息を整える。

「私には伴侶はいません。あなたには分からないでしょうが、
私はこの世界そのものから力を得ています。
この世界そのものが私に協力してくれているのです」
「へえ、なら、この世界を壊す理由が増えたね。
私も本気を出したくなっちゃった」

魔王は自らの力を示すように、その巨大な翼を広げた。

本誌を手にとっていただき、誠にありがとうございます。
悪墮研究機構代表の緋風より御礼申し上げます。
初めての方も、以前より御虫眞の方も、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

実はこのような形で個人誌を頒布するのは初めてで、
これまでは機関誌か合同誌という形で個人原稿を掲載しておりました。

今回の冊子の題材は、悪墮研究機構の公式企画として進行することになった「吸血鬼姉妹」企画です。
吸血鬼姉妹とは、ヴァンパイアハンターである姉のシエラと、それを補佐する妹のエリシア（エリス）が、
ふとしたきっかけで両者とも吸血鬼へと堕ちてしまうという展開の作品です。
2人の他に、エリスの幼馴染みのミアと、シエラの友人であるベアトリスを加えた4人が主要メンバーです。
キャラクターのビジュアル等は冊子の冒頭に掲載しておりますので、そちらも御覧ください。

本冊子には大きく2つの作品を掲載しており、
1つ目が2021年12月に企画しました合同誌「悪墮ちファンブック2A」にて
きりう様にイラストをお願いしました短編そのものです。
既に吸血鬼と化していたエリスを討伐しようとしたシエラが逆に彼女に取り込まれてしまうという
本編とは違うifの展開で、合同誌ではページ数の都合でイラスト2枚のみの掲載となりましたが、
改めて個人誌の形で文章を入れ込んで小説形式としたのが今回の趣旨です。

2つ目はエリスを凶悪な魔王にしてみたいという、これまたifの設定を生み出したいと考えていたところ、
奇跡的にふっとり様からの提案と合致する形で実現しました。
そして、ふっとり様と色々調整していく中で、是非ともカラーページを取り入れるべきだという考えに至り、
巻頭と巻末にそれぞれカラーページを差し込むことになりました。
いつもの冊子と構成が異なり、
目次の前と奥付の後にそれぞれカラーページが差し込まれているのはそのためです。
今回のためにエリスだけでも複数種類のイラストを描いていただいた
ふっとり様には大変感謝しております。

また、表紙イラストを新規で描き下ろしていただいたきりう様にも
改めて厚く御礼を申し上げます。

最後になりますが、個人誌に限らずこれからも
皆様に楽しんでいただけるような企画や作品を
提供できればと思っております。
それでは、次の機会に再び皆様に
お会いできることを心待ちにしております。

悪墮研究機構 代表 緋風

吸血鬼姉妹悪墮ち本 『紅の闇に堕ちて』（電子版）

発行日 2022年8月14日（冊子版）
2022年8月20日（電子版）
発行者 悪墮研究機構
編集者 緋風（悪墮研究機構）

悪墮研究機構
代表 緋風
メール akuochiorg@gmail.com
Twitter @utakuochi
公式サイト akuochi.com

本誌の無断での転載・複製を禁じます。
御連絡はメールアドレス宛にお願いします。

バトルメイド ミア



暗黒竜騎士 シエラ



キャラクター紹介

魔王エリス 戦闘形態



魔王エリス





